

(5枚プロット)

## 梅雨があけたら(第3稿)

作 山口 ひろたか

### 登場人物

松田広太(10)	まつだこうた	小学校5年
野田武史(10)	のだたけし	広太の同級生
松田芳郎(65)	まつだよしろう	広太の祖父
広瀬洋一(10)	ひろせひょういち	広太の親友
松田華(8)	まつだ はな	広太の妹
山下先生(30)	やまのし先生	広太の担任
アツシ(10)		広瀬の同級生
広太の母		

P1～P6は生徒作品

P7～P9は塾長の批評

岡山のとある農家。こそこそと納屋にやってきた松田広太（10）が、赤いハッピを藁の中に隠す。と、祖父の芳郎（65）が帰ってくる。広太の担任・山下先生（30）に学校へ呼び出されたのだ。「広太！」「芳郎の呼びかけにも答えず、広太は慌てて納屋から逃げ出す。

「ハッピがない！」妹の華（8）が泣きながら芳郎の元にくる。広太の先の行動を不審に思った芳郎は、藁の中に隠されたハッピを見つけ華に渡す。

夏休みに入ると『地蔵祭』が行われる。

小さな御輿を担ぐ祭は、地元の子供たちの大きな楽しみで、町は祭りの準備で賑わっている。二ヶ月前父を亡くし、広太と華は住んでいた京都を離れ、母の実家、一人きりの芳郎の家に引っ越してきた。父と暮らした京都を忘れられず、広太は岡山に馴染めずにいた。

部屋に戻る広太。パソコンに向かい、京都の親友・広瀬洋一（10）にメールを送る。いつものように「妹がうざい」と送ると、広瀬

も同じような返事を返してくる。広太は広瀬が同じ思っていることが嬉しい。

終業式の日。クラスは地蔵祭の話題で持ち切り。そんな中広太は山下先生から転入で渡すのが遅れていたハッピを渡される。「どうせ祭には参加しない」クラスに背をそむけ、机に突っ伏す広太の元に、同級生の野田武史（10）がやってくる。「広ちゃんは担がんの？」屈託ない笑顔で話しかけられるのが疎ましい広太は、野田を無視し教室を抜け出す。

夏休み。広太の家では、昼間働きに出ている母に代わり、芳郎が二人の面倒を見ている。休み前からあいかわらず地蔵祭の練習で連日友達を家に呼ぶ華。広太は、揃いのハッピで楽しそうに練習する妹が、なんの抵抗もなくここに馴染んだことが許せない。

そんなある日、広太はクラスメイトと遭遇する。思わず身を隠す広太。その中には野田の姿もあり、広太に気がついた野田は友人を先に帰らせ「一緒に遊ぼう」と誘うが、そん

な野田を広太は再び無視してしまう。家に戻ると「夏休みどうすんの？」広瀬からのメールが届いている。友達がいなと思われたくない広太は、仲間と旅行にいくと嘘をつく。

連日やってくる華の友達で賑やかな広太の家。それとは対照的に、一人部屋で毎日を過ごす広太は楽しそうな華が鬱陶しくてたまらない。ある日広太はついに、誰もいないときを見計らい、華のハッピを燃やしてしまう。

ハッピがなくなっていることに気付いた華は大泣きする。「また作ってやる」と慰め、焼却場にやってくる芳郎。そこには燃え燻ったハッピが残っていた。その現場を影からこっそり見ていた広太は「怒られる」と覚悟するが、芳郎は無言。拍子抜けし、バツの悪い広太は、ますます自分の世界に没頭し、広瀬への嘘メールも次第にエスカレートしていく。

そんなある日、広太の家に野田がやってくる。居留守を決め込んでいた広太だったが、芳郎は勝手に野田を部屋に入れる。仕方なく

野田と遊ぶはめになった広太だったが、野田は事あるごとに広太を褒める。最新のパソコンを使いこなす広太に、遂には野田が弟子にしてくれとまで言い出す。最初は気乗りしない広太だったが、野田に乗せられ少し嬉しい。帰り際、野田は広太を地蔵祭に誘う。しかし、やはり広太は煮え切らないでいる。

それから野田は、度々広太の家に遊びにくるようになる。ある日芳郎は広太と華に手作りのハッピを渡す。それを見た野田と一緒に地蔵祭に出られると喜ぶが、思わず広太は馴れ馴れしくするなど罵声を浴びせてしまう。反射的に芳郎は広太の頬を打つ！ ショックを受けた広太は、家を飛び出してしまふ。

広瀬に連絡し、京都にやってきた広太。広瀬の連絡で、久しぶりにたくさんの同級生が集まる。その中には一人見慣れない顔――「紹介するよ。アツシ」、広瀬から紹介される広太。アツシは広太が転校して、入れ違いのようにやって来た同級生らしい。まだ馴染めない仲

間の中で必死に喋ろうとするアツシを広太が見ている。

「ダサイ奴だ」広太は、広瀬の家で自分と対照的なアツシを罵る。しかし広瀬は、「あいつなりに頑張っている」とアツシをかばう。親友の予想外な言葉に戸惑う広太。そこへ広瀬の親から連絡を受けた芳郎、そして野田がやってくる。「友達？」と広瀬に問われる広太。「うん！」広太の代わりに答える野田。広太は俯いたままだった。

岡山への帰りの電車。野田は、広太と同じく、自分も親がない事を告白する。「友達になつてくれない？」野田にいわれ、広太は泣きながら握手を交わす。

広太の家に野田がやってくる。野田が強引に広太を引っ張っていかうとした時、芳郎は広太に作ったハッピを渡そうとする。野田に借りるからいい」広太は芳郎のハッピを置いていく。梅雨が明け、夏の日差しの中を広太と野田が駆けていく(終)

## 梅雨があけたら 5枚プロット

(第3稿の批評)

また日記に戻ってしまった。日記とプロットの違いは何か 日記はあったこと思ったこと等を順番に記録する。プロットは、最初に提示した事件・事柄がどうなっていくか読み手に興味を抱かせ、その興味が持続するように最後まで引っぱっていかなければならない。

この作品は、P2の10行目で一件落着いている。それから「さて夏休みに入ると」と次のエピソードに移っている。そうすると、その続きのエピソードはただの日記になり、読み手は退屈な説明文を読まされることになる。「芝居がもたない」といわれる内容になっている。10行目までも、ただの事件の記録になってしまふ。

前回の私の添削はどう違っていたか 広太が藁の中にかくしたのは新聞紙の包みであり、中に何が入っているかはわからない。妹

のハッピーが、あるいは全然ちがうものか  
もし違っていたら、「祖父は広太の仕業かと睨  
む」はとんでもない勘違いということになる。  
読み手はどっちだろうかと、それがわかるま  
で興味をつなぐ。祖父は広太を問い詰めるだ  
ろうか、広太はとぼけるのだろうか等々。

さらに、ハッピーがない妹は祭の練習ができ  
なくなつてどうするだろうか、それでも広太  
はとぼけるだろうかと、引きつけられる。そ  
れらの疑問は、その後のエピソードの間もず  
つと読み手の中にあつて、先を想像、期待す  
る。この「どうなるんだろうか」とひきつけ  
るのを「ドラマの引き」といふ。

父の死、親友との別れ、慣れ親しんだ京都  
という都会からまったく知らなかった田舎へ  
きて、屈折している少年の典型的な行動（ハ  
ッピーをかくす）から始まって、彼の梅雨あけ  
まを描くのがねらいだろうから、その少年  
の内面の変化を持続して書き込むべきだ。

P3の、妹が「なんの抵抗もなくここに馴



染んだことが許せない」も、なくなったハッピーの代わりに、例えば祖父が新しいのを買ってやったということにするなら、老齢年金で暮らす貧しい祖父に無駄な出費をさせたと、広太は罪悪感を抱く。つまりは彼の心の変化のワンステップとなる。

P4で、「妹のハッピーを燃やしてしまう」としているが、そこまでやるといやな子にならないだろうか？ イントロで発作的にかくして、そのことですつと苦しみつけ、タイミングぎりぎりになって妹の枕元にそつとハッピーを返しておく、という作りのほうが、視聴者の同情と共鳴が得られ、心温まるドラマになると思う。主人公が愛されるキャラクターでなければ魅力あるドラマにはならない。